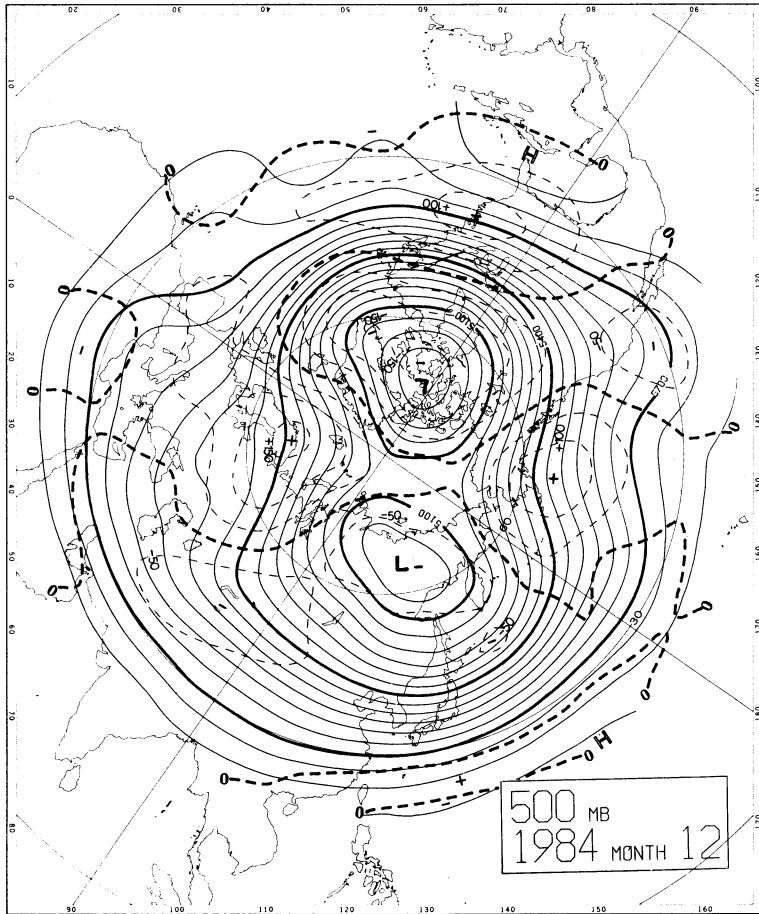


## 月平均500 mb天気図。1984年12月。

(破線は平年からの偏差。単位m)



## 日本は前半温暖・後半低温

12月の大気の流れは60°Nと50°Nでは、2波数型の循環となった。気圧の尾根はヨーロッパとアラスカにあり、気圧の谷は東シベリアとカナダにあった。ヨーロッパの尾根とシベリアの谷はやや東へ寄っているが11月から続いているものである。30°N、40°N帯では1波数と3波数の振幅が大きく、ヨーロッパ、太平洋中部、アメリカ東岸の尾根、中央アジアと北米西岸での谷が目につく。日本の天候のキーポイントの一つになっている90°E付近の気圧配置は、月前半は谷の場となっていた。日本付近は12月第1半旬は正偏差(+50 m)、第2半旬(+150 m)、第3半旬(+30 m)で、気温は日本付近から中国東部にかけて高温が続いた。第4半旬から尾根は東へ移動しウラル山脈付近から

90°Eにかけてが正偏差の中心となり同時にアラスカの尾根も強まって日本付近は谷の場となって気温も低下して来た。第4半旬(-60 m)、第5半旬(-200 m)、第6半旬(-100 m)と負偏差が続きクリスマス寒波、年末年始の豪雪へと変わっていった。25日稚内上空約5000 mでは-53.9°Cと日本の観測史上最低温度を記録した。

ヨーロッパは月を通してほぼ正偏差に覆われて高温であったが、中旬後半から下旬前半には尾根が東へ移動したため一時低温になった。北米大陸では、カナダは負偏差、アメリカ東部は正偏差で気温は高め、西部は負偏差で低めと東西で対照的な分布となっている。

(長期予報課 田崎九一)